

佐賀県立博物館・美術館報

No.83

佐賀市内 1丁目15番23号 TEL 0952 (24) 3947



鹿島市竜宿浦の古面

浮立面

佐賀県内の民俗芸能でも浮立は実に多くの種類をもち、中でも面浮立、舞浮立、天衝舞浮立、獅子浮立はその踊りに仮面を伴っている。ここに紹介する2面はかつて面浮立に用いられた鬼面で、口を開く雌面と口を閉じる雄面に区別される。形式的には阿型、呷型とも言い、佐賀に限らず陰陽2面を組とす

る例は地方に数多く見られるようである。

面浮立の起源については、戦国争乱期の武勇に富んだ歴史事象の中に由来を求めた例が多いようであるが、この古面からはおよそ勇壮さよりもむしろ雨乞いや五穀豊穡を折念する土俗的な庶民の心情がうかがえる。

目次

○浮立面 (古面)	表紙
○神々のかたち 仮面と神像展案内	2～3 P
○資料紹介「佐賀県の鳥類」	4～5 P
○資料紹介「東春振村タツ里遺跡出土の古式土師器(1)」	6～7 P
○行事のお知らせ	8 P

神々のかたち 仮面と神像展

主催 佐賀県立博物館／朝日新聞社
協力 国立民族学博物館／千里文化財団
会場 佐賀県立博物館 博物館教室、3号展示室
会期 平成元年 2月21日(火)～3月21日(火)
開館10:00～18:00
(ただし、入館は17:30まで)
休館日 2月27日、3月6日・13日
観覧料 大人 500円(400円)
大高生 250円(150円)
中小生 150円(100円)
()内は20名以上の団体料金

講演会 演題 佐賀の仮面
講師 米倉利昭先生(佐賀大学教授)
日時 平成元年 1月28日(土)
14:00～16:00
場所 佐賀県立博物館 博物館教室

演題 仮面と神像—ブータンの仮面舞踏劇
講師 栗田踏之先生
(国立民族学博物館第2研究室助教)
日時 平成元年 2月25日(土)
14:00～16:00
場所 佐賀県立博物館 博物館教室

「神々のかたち 仮面と神像展」にあたって

(佐賀の仮面をとおして)

佐賀の仮面を展示するにあたり、1つの提言をし
てみたい。

今回の展覧会で神事面として取りあげる仮面には、
鼻高面、猿田彦の面、神輿渡御の面、天狗面が含ま
れる。これらすべては、神輿渡御すなわち、「お下
り」、「お上り」において御先として行列の先導に用
いられ、露払いの役目を果たすものである。ところで
鼻高面と天狗面を比較したときに、あるいは鼻高
面どうしを制作年代の差異に於いて比較した場合
〔写真参照〕、時代を経るに従いだいに化物化し
ていくことに気付く。これについてはすでに花山院
親忠氏(現・奈良県春日大社宮司)により発表され
ていることであり、中世末期頃からこうした変化の
兆しが見えてくると推測されているが、今回の調査
で改めて実感したのだである。それではどうして
こうした変化が起こったのかと言うことになる。「民
間の古面」(1975 後藤淑・萩原秀三郎共著 芳賀芸
術叢書)によれば、いわゆる天狗面の完成したのは
やはり室町時代に入ってからではないかと考えられ
ている。その理由として室町時代というその時代の
社会風潮が示され、これをもって説明がなされてい
る。その一文を抜粋してみると、「天狗面が生まれた
のは中世封建社会という権力に追従する人々の多
かった戦乱の時代である。強いものに追従しながら、
その威をかけて威張ることが多かった時である。し
かも天狗面が生まれたと想像される室町時代は下剋
上の社会風潮が示すように、下のものが上のもの
にとってかわったり、下のものが上のものの悪態を述
べたり、批判したり、比較的民衆に発言と行動の自
由があった時代であった。このような時代に、その
社会の姿を一般の人々は天狗と神との関係という形

の中に表現したのではなかろうか。」と述べられてい
る。つまり民衆の社会に対する嘲笑が、天狗面を形
づくっていったということであろうか。まさに民衆
の知恵と力を感じるころである。こうした民衆の
働きかけは、鬼面(仮面そのものではないが)に
対しても考えられる。たとえば鬼面の踊りとして佐
賀県の代表的民俗芸能である面浮立は周知のとおり、
悪疫退散、五穀豊穡など我々民衆に幸がもたらされ
ることを願って奉納されるものである。しかし反面、
鬼そのものは怨霊の化身であり、この世に様々な災
いをもたらすと信じられてきた。つまりこの矛盾し
た事象にこそ民衆の知恵が働いたようである。権力
や支配力を持つ人々にとって鬼はまさに権力の座、
支配力をより強力なものとして誇示するための好対
象であったに違いない。これに対し力をもたない一
般民衆にとって、鬼はまさに悪鬼であり、どうし
ようにも手のうちようのない対象であらう。「怨霊
は仏教の概念と重なり合って、多く鬼という形を
とって表現される。鬼を自由に振舞わせ、そして鬼
をなだめ、出来うれば鬼を味方につけて、その強い
力で他の怨霊を追っ払おうとする人々の願いが、芸
能として表現されたのが、鬼の芸であり、鬼面芸で
ある。」というのは「地域文化研究」II(1988 佐賀
大学地域文化総合研究室)における米倉利昭教授(佐
賀大学教授・芸能史)の弁であるが、まさにこうした
民衆と鬼との関係が面浮立の底辺に流れているの
ではないか。鬼はすでに悪鬼ではなく、力強い鬼と
なっているのである。

また、仮面そのものに係わることではないが、金
子信二氏(佐賀民俗学会)により興味深い著述がな
されているのでその一端を紹介しておきたい。「舞浮
立の変遷と伝播」(1978 新郷士刊行協会 新郷士)

の中で「もともと浮立は、宗教性を持っており村の平安と五穀豊穡を祈念して神慮を慰めるもので、民衆（村人）の娯楽としての要素は少なかった。今日の狂言仕立の浮立となったのは演目などから江戸も中期以降と推定できる。」と述べ、さらに「浮立に限らず民俗芸能の変遷の過程にこそ民衆の大きな意志の働きかけがあることを忘れてはならない。儉約令が進み、民衆の娯楽である踊、芝居、相撲などが禁じられるようになり、さらに芸能色の濃い演目への拍車をかけたものと思われる」と述べられている。つまり日常生活に於ける娯楽という場を民俗芸能という場に転化させ、これを自らの生活そのものに取り入れたに他ならず、その結果として舞浮立の変遷が表面化したと考えられる。今、天狗面、面浮立、そして舞浮立の変遷という3つの事柄を取り上げ、そこには民衆の知恵、力の大きな働きかけがあることを知った。つまり各種芸能や諸々の祭は民衆の心そのものであり、生活そのものであることがわかる。もちろんその一翼を担う仮面についても同様である。これを仮面の持つ民俗学的側面とするならば、いっぽうに造形的魅力も忘れてはならない。

我々を取り囲む環境は色や形を抜きにしては語れない。言い換えれば色や形の上に我々民衆の暮らしは成り立っていると言える。そのなかで仮面はどういう位置にあるのかということである。たとえば生活用具のなかには道具とか容器とかいった類があるが、これらすべては何に用いるのかという目的（本来用途）があり、そもそも製作段階で造形的制約が果せられている。その点仮面は表現の自由が保障されている。それは、とりもなおさず民衆の美的規範が集約されていることを示している。仮面そのものはけして日常的ではないが、そこに示された色、形は何よりも日常性を表現している。

仮面の群像の中に、その時代時代に生きた民衆の心、さらに尽きることのない人間の創造力をみいだしてもらいたい。（学芸員 山崎和文）



左から八兵衛、七兵衛、六兵衛（山内町島海） 八兵衛浮立

展示構成

オセアニア地域 43点

バブアニューギニア・ビスマルク諸島・ソロモン諸島・ニューヘブリデス諸島・ニューカレドニア・オーストラリア

アフリカ地域 114点

マリ・セネガル・ブルキナファソ・ナイジェリア・ガーナ・コートジボワール・リベリア・シエラレオネ・ギニア・カメルーン・ザイール・ガボン・コンゴ

アジア地域 34点

ネパール・ブータン及び中国・インド・スリランカ・マレーシア・インドネシア

アメリカ地域 18点

カナダ・アメリカ合衆国・メキシコ・コロンビア

佐賀の仮面 約50点

*民俗芸能面

面浮立 舞浮立 猪浮立 天衝舞浮立 獅子浮立 獅子舞 剣突き舞 野狐踊り

*民俗行事面

天狗さん祭 修正会（裸祭り） 虎まわし

*能・狂言面

榊田宮祭 高志狂言

*神事面（信仰面）

御神幸 雨乞い



鼻高面（呼子町加部島）

正安2年銘 田島神社



鼻高面（諸富町三重）

元亀3年銘 新北神社



翁面（太良町竹崎）



竹崎観世音寺修正会鬼衆

資料紹介 佐賀県の鳥類

— 1988年の記録を入れて —

佐賀県に生息する鳥類は1986年末で309種(7亜種を含む)であったが、その後観察された8種を入れると317種となる。日本産鳥類544種(日本鳥類保護連盟1988年3月)の58%が記録されたことになる。佐賀県産鳥類を分類別に概観する。()内の数は、佐賀県産の種数である。

1. アビ目(3種) アビ・オオハムなど
2. カイツブリ目(5種) カイツブリ、ハジロカイツブリ、カムリカイツブリなど。
3. ミズナギドリ目(4種) オオミズナギドリなど玄界灘や有明海に生息、個体数は少ない。
4. ペリカン目(5種) カツオドリ、ウミウ、カワウなど玄界灘に多い。
5. コウノトリ目(20種) ゴイサギ、アマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、クロサギ、アオサギなどサギ科15種とコウノトリ、ナベコウのコウノトリ科2種とヘラサギ、クロトキなどトキ科3種。中へ大形の水鳥で、脚と首が長く、主に湿地で採餌する。ナベコウは1988年11月1日、藤津郡塩田町、湖野正一郎氏宅で保護され、鹿島農林事務所の坂本和底氏が持参された。全長99cm、翼開長170cmの大形の旅鳥で、嘴と目の周囲は赤みがかった灰青色で頭から頸、背は褐色の若鳥であった。イワシやキビナゴ、アジなどを丸飲みし、5日の夜から屋根の上で眠り、9日に大陸南部へ旅立ちをした。



ナベコウ *Ciconia nigra* 田中撮影

6. ガンカモ目(32種1亜種) サカツラガンなどガン類6種。コハクチョウなどハクチョウ類2種。ツクシガモ類2種。オシドリなど淡水ガモ12種とアメリカカモ1亜種。ホシハジロ、シノリガモなど海ガモ類7種。アイサ類3種。サカツラガンは1987年10月19日佐大農学部学生の桑原修一、権藤謙二両氏によって佐賀郡川副町の国造干拓に2羽飛来した

のが観察された。頭頂から後頸は黒褐色、頬から前頸は淡褐色なのが特徴である。



サカツラガン *Anser cygnoides* 横尾暢哉撮影

シノリガモは1988年4月2日、唐津市の松浦川河口で中学1年生の山口大志君によって観察された。全長42cm翼開長66cmの中形の家ガモで、この時の2羽は雄で、顔の前半、目の後方などに白斑を持ち、わき腹は赤褐色であった。佐賀県では初記録で九州でもまれな冬鳥である。写真は丹野譲氏撮影



シノリガモ *Histrionicus histrionicus*

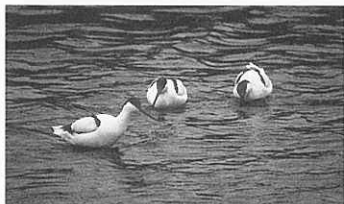
7. ワシタカ目(21種) ミサゴ・アカハラダカなど16種とハヤブサ科5種。アカハラダカは1988年6月に東松浦郡鎮西町加唐島で福田司氏によって初記録された。全長30cmの小形のタカで、ツミの雄に以てている。成鳥では翼の下面は白っぽく、胸は赤色がかっている。
8. キジ目(4種) コジュケイ、ヤマドリ、キジなど。太った体のニワトリ型の鳥で、飛ぶことは上手ではない。九州北部のヤマドリは亜種のアカヤマドリである。
9. ツル目(9種) ナベヅルなどツル科2種とクイナ、バンなどクイナ科7種。ツルは鹿児島県出水市への渡りの途中休憩のため降りたもので、県下各地で観察されている。
10. チドリ目(71種) タマシギ科1種。ミヤコドリ科1種。コチドリ、オオチドリ、ダイゼンなどチ

ドリ科11種。キョウジョウシギ、アカアシシギ、ソリハシシギなどシギ科36種。ソリハシセイタカシギなどセイタカシギ科2種。ヒレアシシギ科2種。ツバメチドリ科1種。ユリカモメ、ウミネコ、コアジサシなどカモメ科15種。ウミスズメ科2種。チドリ目は長い脚といういろいろな形をした嘴を持つ水辺の鳥で、唐津・伊万里の玄界灘と有明海沿岸に多い。特にシギ・チドリ類は渡りの春と秋に有明海で休息をする。オオチドリは1988年3月22日に川副町の国造干拓で、横尾鶴哉、桑原修一両氏によって初記録がなされた。胸に赤褐色と黒色の帯をもち、他のチドリと異なり、乾いた畑や荒地を好み、地上を活発に歩きまわり昆虫や小動物を捕える。



オオチドリ *Charadrius asiaticus* 田中撮影

ソリハシセイタカシギは1987年12月2日に杵島郡福富町の六角川河口で轟木政隆氏により撮影されたものである。全長44cm翼開長78cmの大形のシギで、足と嘴の長い水鳥で、体は白っぽく、頭上、後頸、肩羽など一部が黒い。佐賀県初記録である。



ソリハシセイタカシギ *Recurvirostra avocetta*

11. ハト目 (3種) カラスバト、キジバトなど。
12. ホトトギス目 (5種) ジュウイチ、セグロカクコウ、ホトトギスなど。
13. フクロウ目 (6種) トラフズク、コミミズク、フクロウ、オオコノハズクなど。
14. ヨタカ目 (1種) ヨタカ。

15. アマツバメ目 (2種) ハリオアマツバメなど。
16. プッポウソウ目 (6種) ヤマセミ、アカショウビン、カワセミ、ヤツガシラなど。

17. キツツキ目 (4種) アオゲラ、コゲラなど。

18. スズメ目 (109種と6亜種) ヤイロチョウ科1種。ヒバリ科2種。ツバメ科4種。セキレイ科8種1亜種。サンショウクイ科1種。ヒヨドリ科1種。モズ科4種1亜種。レンジャク科2種。カワガラス科1種。ミソサザイ科1種。イフヒバリ科3種。ヒタキ科ツグミ亜科コマドリ、シマゴマ、ツグミなど15種1亜種。ウグイス亜科ウグイス、キマユムシクイ、カラフトムシクイ、セウカ、コヨシキリなど13種1亜種。ヒタキ亜科8種。カササギヒタキ亜科サンコウチョウ1種。エナガ科1種。ツリスガラ科1種。シジュウカラ科4種。メジロ科1種。ホオジロ科13種1亜種。アトリ科11種1亜種。ハクオドリ科スズメなど2種。ムクドリ科3種。コウライウグイス科1種。カラス科7種。最も種類が多く、ハシブトガラスのような大形の鳥からキクイタダキのような小形の鳥までおり、高山から低地、森林から草原のいたる所に生息している。スズメ目では3種が新しく加唐島で福田司氏により観察されている。ツグミ亜科のシマゴマは1988年4月19日に、ウグイス亜科のキマユムシクイは同年5月17日に、カラフトムシクイは同年5月13日にそれぞれ初記録がなされた。この3種は全長10~13cm程度の小形の鳥で、シマゴマは赤褐色味の強い尾を持ち、のど・胸に褐色の波状の模様を持ち、ヒンコロコロと鳴く。キマユムシクイは顔の眉斑のほか、翼に2本のはっきりした淡色線を持ち、チジッチジッと地鳴きする。カラフトムシクイは腰が黄色で、チィチィまたはシー



コウライウグイス *Oriolus chinensis* 福田撮影

シーと鳴く。コウライウグイスは1986年6月に加唐島で福田司氏により初記録がなされて以来、加唐島には毎年飛来しているようだが、1987年6月には佐賀郡大和町の林業試験場に飛来した。

東春振村タケ里遺跡出土の古式土師器(1)

古墳時代初頭前後の日本列島はかつてない広範な人と物の交流が認められる。それは新時代の胎動とも言うべきダイナミックな動きである。近年佐賀県においても東海・北陸・近畿・山陽・山陰など各地域の土器が相次いで発見されている。ここに紹介する資料もその1例であるが、7個体以上の庄内大和型甕を含む点で特に注目される。

タケ里遺跡は佐賀県神埼郡東春振村大字三津字庄尾分に所在する。春振山地南麓の洪積段丘上、標高26～35m付近である。昭和56年度に佐賀県教育委員会・東春振村教育委員会が主体となり、約12,000㎡の発掘調査が実施され、縄文時代から鎌倉時代に至る多数の集落関係遺構が検出されている。この内特に中心となるのが弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の遺構で、竪穴式住居跡190軒・掘立柱建物跡28棟の他、土壇・溝跡等が検出されている。本資料を出土したS K 354土壇は遺跡の北部にあり、平面不整形で、長さ2.6m、幅2.0m程を測る。削平を受けて皿状の窪みを残すばかりであるが、墳底の南西側より土器片が密集して検出された。いわゆる土器溜であるが、廃棄時の一括性は高いものと認定できる。

出土土器は粗製甕の破片が多数を占め、個体数の正確な算定は難しいが、図化したものでは甕20個体、壺4個体、高杯4個体、台付鉢1個体、鉢1個体、小型器台1個体を数える。甕は精製甕1～3(A類)と粗製甕4～16(B類)に大別されるが、いずれも畿内系のものである。A類はすべていわゆる庄内大和型甕で、図示した以外のものを含めて7～8個体分の口縁部・胴部破片がある。1は最も残りの良いもので、復元口径16.4cm、復元胴部最大径22.5cmを測る。胴部下半を欠失するものとやナデ肩で、最大径は胴部のやや上位にくるものと認められる。頸部はシャープな稜を作らず、緩やかに反転する。口縁部は薄く、端部を上方に積み上げている。胴部外面は左上りの細筋タタキが顕著で、頸部直下のみ斜方射状のハケメを間隔を置いて施している。内面は斜位のヘラケズリであるが、頸部直下には及ばない。色調は内外面とも灰褐色で、胎土には金雲母を多く含む。2は口頸部の破片で、端部は積み上げた後外側面に凹線を施している。色調は暗灰褐色である。3も口頸部の破片であるが、1・2に比べ大きく開く。また端部の積み上げが小さく、断面三角形に

近い。色調は明黄白色である。口縁部形態・色調は基本的にこの3種に包含され、胴部外面のタタキもすべて左上りである。

B類はいわゆる伝統的V様式型甕の系譜をひくものである。これらは胴部最大径が口径を上回り、口頸部が長いもの(BⅠ類)と短いもの(BⅡ類)、さらに胴部最大径と口径がほぼ等しいもの(BⅢ類)に分けられる。BⅠ類(4～12)では口縁端部が丸いもの(4～9)と角張るもの(10・11)があり、胴部外面の調整においても、タタキを残すもの(4・8～12)と全面ハケ調整のもの(5～7)がある。内面はすべてハケおよびナデ調整である。BⅡ類(13)は口縁端部が丸く、胴部外面タタキ、内面ハケ調整である。BⅢ類(14～16)は鉢に近い小型のもので、胴部は最大径をやや上位に有する。B類はすべて橙褐色の色調を呈する。

壺は4個体あり、いずれも短頸の広口壺である。17は反外する口縁端部に面をつくり、わずかに積み上げていいる。下腹れの胴部外面はハケ後ナデしており、粗いヘラミガキを施している。胴部上半部の退色の相違より、斜格子状に編まれた竹籠のようなものに包まれていたことがわかる。18・19は類似した器形であるが、19の口縁端部はやや内傾する平坦面をつくっている。20は小型品で口縁端部は尖り気味におわる。

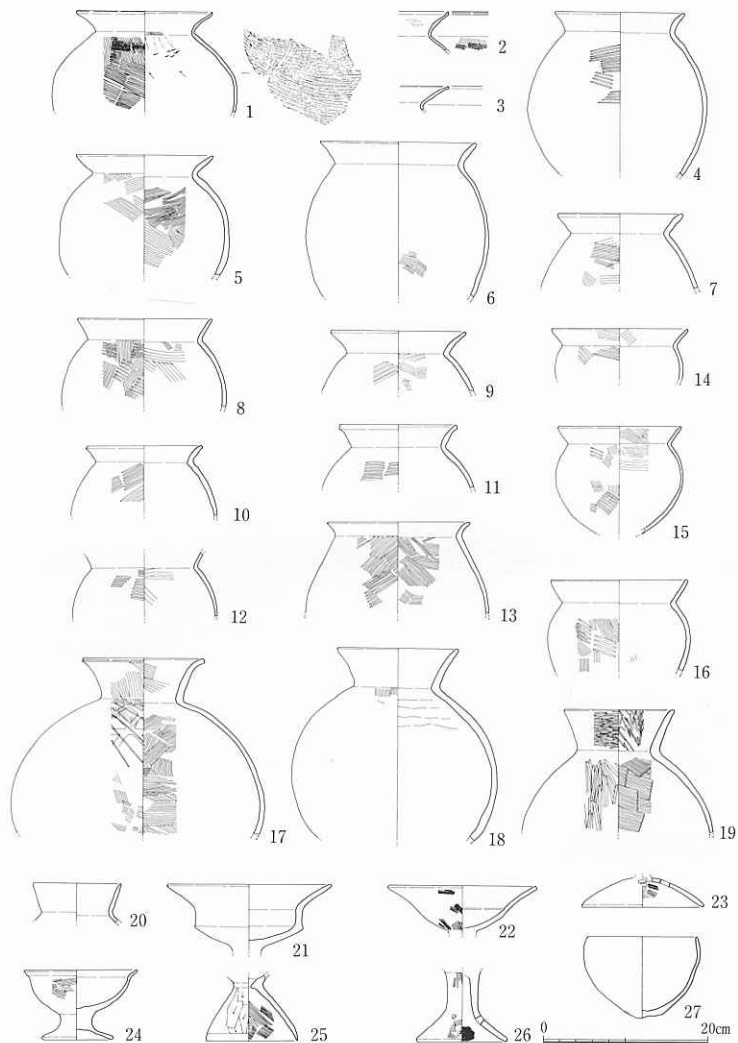
高杯も4個体あるが、21・23が畿内系、22・26が在地系のものである。21はいわゆる有段高杯に近いが、屈曲は緩やかである。22は口径の割に深く、杯部外面の稜は消失している。23は低脚高杯の脚部で、内湾が強い。

台付鉢24は外面ハケ、内面ナデ調整である。また鉢27は底部付近に穿孔を有する。25は小型器台であるが、受部と脚台部の境は緩やかに屈曲する。

以上S K 354土壇出土の土器を簡単に紹介したが、これらの編年的位置付けについては在地系土器が少ないこともあって必ずしも明確にしない。従来北部九州において出土する畿内系の土器群はその大半が布留0式以降のものであり、特に庄内大和型甕についてはその傾向が強い。その点本資料は布留傾向型甕や布留型甕を1点も含まず、庄内大和型甕を7個体以上も有する点で特異であり、極めて注目されるが、甕5などは布留型甕の影響を受けているとも思われ、なお慎重な検討が必要であろう。

本資料は現在佐賀県文化財資料室(T E L 0952-23-4537)に保管されている。

(学芸員 蒲原宏行)



タヶ里遺跡SK354土壙出土土器実測図 (S = 1/6)

行事のお知らせ（昭和63年度）

○常設展（第3期・第4期）

（ ）内は団体料金

展 覧 会 名	会 期	観 覧 料	会 場
佐賀県の歴史と文化	12月1日(休)～3月31日(金)	大 人 200(150)	博 物 館
博物館新収蔵品展	3月26日(日)～4月2日(日)		〃
近代の美術・工芸	12月1日(休)～1月22日(日)	大・高生 150(100)	美 術 館
	3月1日(休)～3月31日(金)	中・小生 70(50)	
美術館新収蔵品展	3月1日(休)～4月2日(日)		〃

○企画展

展 覧 会 名	会 期	観 覧 料	会 場
神々のかたち ― 仮面と神像展	2月21日(休)～3月21日(休)	大 人 500(400) 大・高生 250(150) 中・小生 150(100)	博 物 館

講演会

2月25日(土) 午後2時～午後4時

国立民族学博物館助教授 栗田 靖之氏 「仮面と神像 ― ブータンの仮面舞踏劇 ―」

○館外・企画展

展 覧 会 名	会 期	会 場
第11回さが行動展	1月10日(休)～1月16日(日)	美 術 館
第5回佐賀水墨画会展	1月18日(休)～1月22日(日)	〃
ル・アール美術館展	1月27日(金)～2月26日(日)	〃
第3回ハチロク展	3月1日(休)～3月5日(日)	〃
第37回佐賀大学美術工芸科卒業展	3月7日(休)～3月12日(日)	〃
富永将碑展	3月14日(休)～3月19日(日)	〃
第11回二紀佐賀グループ展	3月21日(休)～3月26日(日)	〃

○博物館土曜教室

テ ー マ	講 師	日 時
佐賀の野鳥―城内公園探鳥―	佐賀県立博物館資料係長 田中 裕	1月21日(土)午後2時～午後4時
佐賀の仮面	佐賀大学 教授 米倉利昭氏	1月28日(土) 〃
土器の復元に挑戦しよう!! part2	佐賀県立博物館学芸員 蒲原宏行	2月11日(土) 〃

博物館・美術館報 第83号	発 行	佐賀市内1丁目15番23号
発行年月日 平成元年1月10日		佐賀県立博物館
編 集 出 和 人	印 刷	佐賀県立美術館
		(有) 大同印刷